文教厚生委員会 行政視察報告書

令和元年１２月１６日

狭山市議会議長
加賀谷　　勉　　様

文教厚生委員会
委員長　笹　本　英　輔

当委員会は、下記のとおり、有限会社長者の森及び大阪府茨木市を視察してまいりましたので、その概要について報告いたします。

記

日　　程　令和元年１０月２３日（水）、２４日（木）

視察事項　１　有限会社長者の森
　　コミュニティホーム長者の森・保育所もりのくまさんについて
　　２　大阪府茨木市
　　茨木っ子グローイングアッププラン（一人も見捨てへん教育の取り組み）について

参 加 者　笹　本　英　輔　　西　塚　和　音　　三　浦　和　也
　　内　藤　光　雄　　金　子　広　和　　綿　貫　伸　子
　　大　沢　えみ子

同 行 者　関　口　　浩　　長寿健康部次長

随 行 者　吉　澤　俊　充　担当書記

【有限会社長者の森：コミュニティホーム長者の森／もりのくまさん保育園】

［所 在 地］ 静岡県焼津市三ケ名
［会社設立］ 平成 15 年 7 月 14 日
［資 本 金］ 800 万円
［従 業 員］ 49 人（パート社員を含む）
［事業内容］ デイサービス・ショートステイ・グループホーム・居宅・保育所
［会社概要］

平成 17 年 4 月 1 日に介護施設（コミュニティホーム長者の森）と、保育所（もりのくまさん）との複合施設としてスタートする。当初は、認可外の保育所であったが、平成 30 年 12 月から、事業所内保育として焼津市から認可を受けている。

・デイサービスは１８人定員、営業時間は月曜日から土曜日の 9:20～16:30、
　休日は毎週日曜日、年始
・ショートステイは、２０床（２ユニット）、土曜日、日曜日、祝日の送迎あり
・グループホームは、１８床（２ユニット）、焼津市在住の６５歳以上、
　要支援２以上から、介護度５までの認知症と診断された方が対象
・保育園は、１６人定員、保育時間は 7:30～18:00、日曜日、祝日はお休み、
　対象年齢は生後５ヶ月から２歳児まで

【 焼津市（参考）】

［市制施行］ 昭和 26 年 3 月 1 日
［人　　口］ 139,505 人（令和元年 10 月 31 日現在）
［面　　積］ 70.31 平方キロメートル
［市の概要］

焼津市は、静岡県の中央部に位置し、京浜地域（東京）と中京地域（名古屋）のほぼ中間部にあたる。平成 20 年 11 月 1 日に大井川町を編入し、現在の市域になる。カツオやマグロが水揚げされる遠洋漁業の基地として、全国的に知名度が高い焼津港があり、隣接したところに近海、沿岸のアジやサバが水揚げされる小川港、その他にシラスやサクラエビが水揚げされる大井川港がある。全国有数の水揚げを誇る焼津漁港の周辺には水産加工団地をはじめ水産加工業が盛んである。カツオ節の生産の節類のほか、黒はんぺんなどの練り製品や冷凍食品の加工がおこなわれている。農業は、大井川の豊富な水があることから、稲作が行われているほか、施設園芸や露地野菜にトマトやイチゴ、菊の栽培、茶やミカンなど温暖な気候を生かして栽培がおこなわれている。

気候については、海に近いこともあり夏場は蒸し暑く、曇りの日が多い。冬場は晴れ間が多いものの風が強く、年間を通じて湿度は高い傾向にある。

【視察内容】

全国の民間の福祉施設の中でも特徴的な取り組みをされているコミュニティホーム長者の森　石原孝之取締役より説明を受け、その後、デイサービス、グループホーム、ショートステイを視察した。最後に保育の視察を行い、幼老共有スペースにて子どもと高齢者がふれあう様子を視察した。

（１）多世代交流・施設の運営、
保育・介護連携の利点

多世代交流により、認知症の施設利用者が、子どもの歌う声、賑わいの声を聴くことにより、目の動きや顔の表情が変わるなど、子どもへの愛情を感じる反応が表れた。こうした事例は、平成 25 年 1 月厚生労働省の『宅幼老所の取り組み』に掲載されたことにより、その後各地から視察の申し入れが相次いだ。

（２）事業実施の背景

これまでの施設は、幼稚園、保育園、介護施設など、それぞれ別々の建物で運営されてきた。それを一つの建物で運営することにより、現場で働くスタッフや子どもを預ける保護者などの、相乗効果が生まれることを目指した。また、福祉関係への就労を目指す学生が減少傾向にあることや、女性の社会進出により、少子化が進んできたこともあり、医療、福祉関係に従事する人材が減ってきていることも背景のひとつとして挙げられる。

静岡県では誰もが自由に集え、過ごせる居場所、ワンストップ相談、共生型福祉施設を３つの柱とした「ふじのくに型福祉サービス」を平成２２年から実施したが、それに先んじて、当該施設では平成１７年から実施している。

（３）離職率の低い職場を目指して

①褒め合う、認め合う風土をつくる

入口ロビーに、スタッフ写真を掲示し、利用者に人気投票を行ってもらう。結果に応じてスタッフを評価し、スタッフのモチベーションを高める。

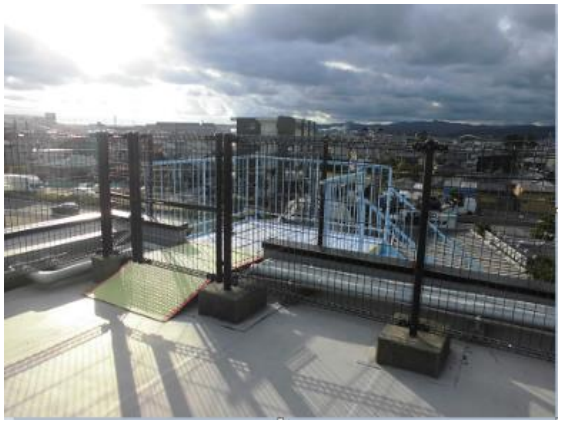
②コミュニケーションが取れるようにする
　仕事以外で、飲み会や趣味など、積極的にコミュニケーションを図る
③ホテルの接遇に学ぶ
　アロマやＢＧＭを流す
　体現したいアイデアを出し、実現する
④子どもと高齢者の接点をつくる仕掛けづくり
　中庭を利用し、節分の豆まきや卒園児の餅まき、お菓子まきなどのイベント
　夏場、水プールや水鉄砲で、子どもたちが盛り上がるきっかけをつくる
　２階の入居者が子どもたちに手を振る、来訪者がガラス越しに微笑む
⑤スタッフとの意識共有
　施設のコンセプトをスタッフにしっかり理解してもらう
　新しい試みをチャレンジしていくこと、意思や意見を共有する努力をするなど、利用者の立場で常に考えるようにする

2 階から中庭をのぞむ

（４）子どもとお年寄りのふれあう機会をつくる
①子どもたちの受け入れ　７時３０分
②デイサービスの受け入れ　９時～９時３０分
・朝、子どもたちがデイサービス利用者を出迎える
・玄関先で靴の履き替えしている時間にコミュニケーションができる
③園外保育　１０時～１１時
・公園に移動するときに、一緒に行けるお年寄りに子どもの手を引いてもらう
・外に出る理由ができる
④雨天で園外保育に出られないとき
・子どもは館内で遊ぶため、上階のグループホーム、ショートステイ利用者に会いに行く
・スタッフにはハザードマップがある（手を挟みやす

いところなどの危険箇所）
・各部屋の入口には緑、黄、赤の表示プレートがあり、感染症等が確認された場合、赤色を表示して交流禁止にするなど、スタッフ間で情報を可視化し、共有する

（５）介護のマイナスイメージ払拭、地域とのつながり
①介護関係で使われている用語は極力使わない
・利用者さんとは呼ばずに、「お客さん・ゲスト」
・職員は「スタッフ」
・面会や入所、退所の代わりに「チェックイン、チェックアウト」
②呼び方にこだわる理由
・介護の３Ｋ（きつい、汚い、危険）イメージを払拭したい
・他業種を意識する
・アンケートで意見を聴取
③介護疲れからの切り替え（家族へのケア）
・ショートステイに来ることにより、介護疲れからの切り替えができる
・墓参り、ショッピング、居酒屋など、利用者のご家族への提案
④津波からの避難所
・２４時間、周辺住民の誰でも、外階段で屋上にのぼることができる



⑤ネロリカフェ（毎週日曜日）
・月曜日から土曜日はデイサービスの場から、日曜日はカフェに
・地域の 60 代～70 代のシニアが中心になって運営している
・地域の代表の方の交代を機にケアマネ看護師が店長になり、認知症予防カフェへ

（６）介護保険外サービス
①朝市・ヤミー市（闇市）・夏祭り
・朝市は、周辺住民にカフェを知ってもらうために、これまで 29 回実施した
・その他にも地域の有志と協力し、各種イベントのプロデュースを行っている
②イベントの出店者への呼びかけ
・イベントの方向性は正しさより、楽しさで集客につなげる
・大人が非日常を楽しむ

【主な質疑】

Ｑ 子供と高齢者のふれあいに対する、保育園利用者からの評価は。

Ａ お年寄りとのふれあいを通じて、子どもの人見知りがなくなったとの声があった。

Ｑ 新たな取組みを推し進めていく原動力となるものは何か。

Ａ ベンチャー意識があること。積み上げられた既存のものを一度壊して、組み立てていくこと。正しさより、楽しさが必要。しかし、型は熟知したうえで、型破りなことをしていく。

Ｑ 保育園を卒園した子たちが、何かの機会に来所することはあるか。

Ａ 小学生になってから卒園生でボランティアをしている子や、職業体験のワークワークチャレンジでやってくる子がいる。

【大阪府 茨木市】

［市制施行］ 昭和 23 年 1 月 1 日
［人　　口］ 282,303 人（令和元年 10 月末日現在）
［面　　積］ 76.49 平方キロメートル
［概　　要］

茨木市は、大阪府北部にあり、北側に接する京都府亀岡市とは府境で区切られる。ほか隣接する市町村は、東側に高槻市、南側に摂津市、西側に吹田市、箕面市、豊能郡豊能町となっている。市域の北部は丹波高原の老の坂山地の麓にかかり、南部は大阪平野の一部である三島平野が広がる。南北約 17 キロメートル、東西約 10 キロメートルであり、東西は短く、南北に長い形状を示している。

鉄道では、京都駅と大阪駅の中間に位置しており、大阪のベッドタウンの様相がありつつも、京都にも比較的出やすい位置関係にある。鉄道路線も JR 茨木駅と阪急茨木市駅が多少離れているが並走しているため、周辺にはマンションが多く建設され、通勤・通学・買い物に便利な文教都市としての性格がある。昭和 45 年には大阪万博が隣接する吹田市の大阪万博公園で催され、その当時は茨木市が表玄関になり、その後の発展に大きく寄与した。また、茨木市の北西部には、2004 年から国際文化公園都市（愛称：彩都）として開発が続いており、茨木市が文教都市としての価値が高まることが期待される。

昨年の平成 30 年 6 月 18 日には、大阪北部を震源とする大阪北部地震が発生し、最大震度６弱が観測された。

歴史的な側面では、隠れキリシタンの郷として、フランシスコザビエルの絵が発見されており、そうした土地柄でもある。また、茨木市は幼児期から旧制中学卒業までの間、ノーベル文学賞受賞者の川端康成が暮らしていたことでも有名であり、現在では川端康成のゆかりのふるさととして、川端康成文学館が市民の文学に親しむ機会を創り出している。

【視察内容】

茨木市学校教育部 加藤拓部長をはじめとする関係職員より説明を受け、質疑応答を行った。

（１）「茨木っ子グローイングアッププラン」推進のあらまし

小学校が 32 校　　中学校が 14 校

①第 1 次 茨木っ子プラン 22（平成 20 年～平成 22 年）
②第 2 次 茨木っ子ステップアッププラン 25（平成 23 年～平成 25 年）
③第 3 次 茨木っ子ジャンプアッププラン 28（平成 26 年～平成 28 年）
④第 4 次 茨木っ子グローイングアッププラン（平成 29 年～令和元年）

・これまで一貫して、「一人も見捨てへん」という考え方は変わらずにきている
・平成 20 年に小学 1 年生だった子が、現在高校 3 年生になっている
・3 ヶ年でＰＤＣＡサイクルが回るようにしている
・大阪大学大学院人間科学研究科教授 志水宏吉先生に携わっていただいている

（２）プランの特徴

①「5 つの力」を設定している

・家庭環境も生活背景も違うすべての子たちが、生きる力をつけていく

・「ゆめ力」「自分力」「つながり力」「学び力」「元気力」

・上記の５つの力を合わせながら、テストで図れるよう学力を伸ばしていく

・指標を設定し「見える化」していく

➡第 3 次までは、4 つの力で見ていた（「元気力」を含まず）

全国学力・学習状況調査の児童生徒質問集の中から 4 つずつを抽出し、子どもたちの変化をみていた　伸びる傾向にあった

➡第 4 次からは、5 つの力に変えたことから、それぞれ 3 つずつ取り出すようにした

②「学力の低位層」に着目した取り組みをしている

・高位層と低位層に二極化し、平均点だけではわからない

・正当率 40%以下の低位層の子どもたちを減らしていくこと

・低位層の子どもたちが減ることで、正答率も上がっていくものと考えた

・多くの支援員や学習サポーターを設置している（現場から喜ばれている）

・小規模校 2 校を除く 44 校に、130 名のサポーターを 2 名～4 名に振り分けている

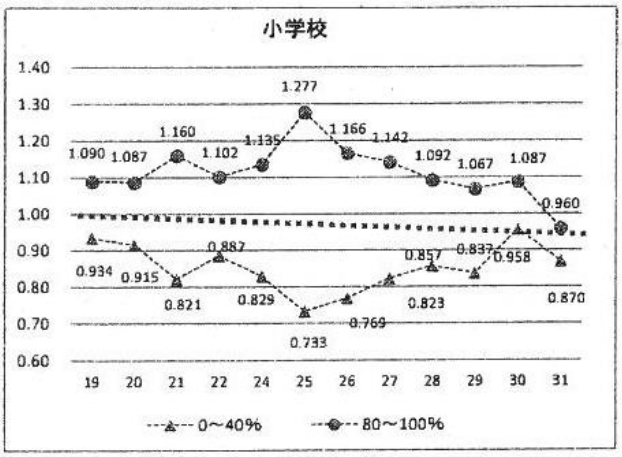
・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーが家庭をサポート

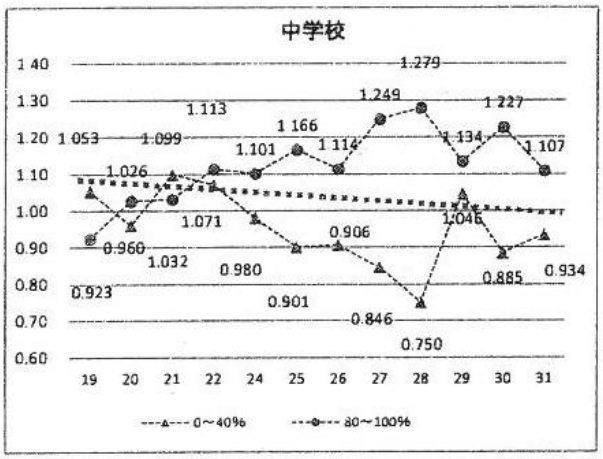
➡小学校の状況　12 年間で低位層の減少傾向がみられた

中学校の状況　平成 29 年度の中学 3 年生を除き、12 年間で概ね低位層の減少傾向

➡今年度の小学校の状況　低位層は減ったが、高位層も減る結果に

今年度の中学校の状況　低位層が増加し、高位層も減った（課題をどう克服していくか）

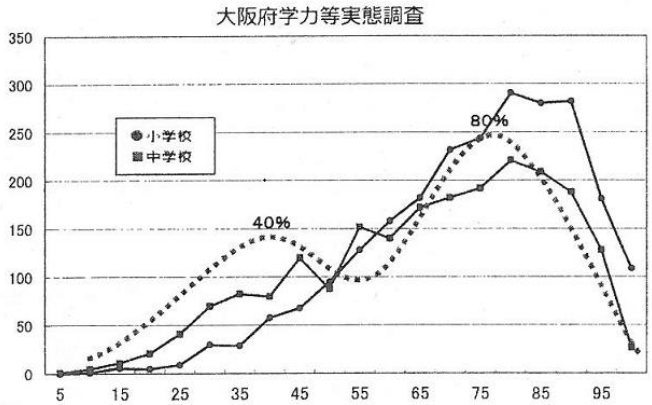




③「教育委員会と学校の連携」ができている
・立ち上げ当初、学力向上担当者会議をつくったが担当者の意識はバラバラだった
・プランを進行する中で(結果が伴ったことから)、徐々に取り組みは有効との認識が浸透した
・第4次プラン前のアンケートで97.9%が有効と判断　学校も同様に感じている
・学校の担当者は、学校を支える中心となるような設定をあげてもらう
・小中連携に幼保を加え、幼保の連携コーディネーターに入ってもらい進めている
・いままでよりも、先生方が意欲的に取り組まれるようになってきた

（3）プランを立てた経緯

①きっかけは、平成18年度大阪府学力等実態調査の結果から（茨木っ子プラン22）



・小学校は、一般的な山型のグラフだった
・中学校は、80%付近及び40%付近にそれぞれ山があった
➡小学生の時にはなかったものの、中学校3年時には40%付近に山が出来ることは、中学校3年間で学力格差が広がっているのではないか
➡学力向上の施策をつくる必要があることから、プランが作成された
・学校には学力向上3ヶ年計画を徹底
・学力向上担当者会議に担当者を出してもらう（当初8回の会議が開かれる）
・授業研究会を小学校6回、中学校3回の実施
・授業づくり推進交付金を交付し、大学の先生を講師として招く、研究図書購入等
➡小学校では、高位層は増え、低位層は減る傾向がみられた
中学校では、高位層が増えたが、低位層も同時に増えてしまう傾向がみられた
➡結果から、中学校に力を入れていく必要がある

②茨木っ子ステッププラン25
・平成25年度より全国から注目され始める
1)主な取り組み
・体力向上担当者を決め、体力向上担当者会議(年3回)に参加
・フレッシュサポーターによる指導
・校内研支援事業
2)施策・事業
・中学校に専門支援員を配置
・スクールソーシャルワーカーを全中学校区に配置
・中学校に電子黒板機能付きプロジェクタを配備

③茨木っ子ジャンプアッププラン 28

1）プラン 28 の重点課題

・学校の状況に応じた事業　　運営が困難な状況にある学校を支援する（傾斜配分）

・保幼小中連携教育の推進　　茨木市の状況に応じた保幼小中連携を推進する

2）施策・事業

・全校対象２３事業　成果校と支援必要校に分け

　支援教育サポーター、生活指導支援教員配置など　必要に応じた事業展開

④茨木っ子グローイングアッププラン

1)4 つの方針

・「一人も見捨てへん」教育の実現

・持続可能な教育施策と教育活動

・茨木型保幼小中連携教育の推進

・総合的な教育施策への転換

2)持続可能な教育施策と教育内容

・事業の選択と集中により、「持続可能な教育施策」としている

・学力調査からの持続性　右肩上がりの成長から良好な水準の維持を目指す

【主な質疑】

Q 学識経験者とどのようにして繋がりを持ったのか。

A 志水先生は、東京大学から大阪大学に戻られることを事前にキャッチし、アプローチした。著書が多く、以前から注目していた。

Q 10 年以上にわたり、計画が継続している理由は。

A 全国各地のデータを利用して分析し、事業ごとの効果を検証し続けてきたことにある。

Q 児童生徒の自己肯定感についてはどのように考えるか。

A 集団づくりの中で、子ども同士で認め合う取組みを意識し、授業にグループワークなどを取り入れている。市としては、子ども達が自分達の活動を振り返り、それに対して親や大人が具体的に価値付けしてあげることが重要と考えている。今後は、さらに子供達の細かな頑張りを見つけていくことについての取組みを重要視する。

以上が視察の概要であり、報告といたします。